

全文構造解説

この冊子の使い方

1つの文について、【英文】→【構造】→【解説】→【語句】の順で並んでいる。

1. 【英文】を音読する。構造と内容が理解できれば、次の【英文】に進んでよい。理解できなければ、
2. 【構造】を音読する。文の構造と、まとめりごとの訳（直訳）を確認する。さらに、必要に応じて、
3. 【解説】を読む。直訳を咀嚼して、要するにどういうことを言っているのか、内容の理解を試みる。
この時点で理解できなければ、「解答・解説」の日本語訳（意識）で内容を確認する。
4. 理解した内容を念頭に、構造と内容が理解できるまで、繰り返し【英文】と【構造】を音読する。
5. 【語句】を音読して、意味を確認する。

最後にもう一度、できれば二度三度、本文英文を、できるだけ速く、頭から意味をとりながら読むこと。

凡例および注意点

凡例：

① = 大問番号 ❶ = 段落番号 ❶ = 文番号

【構造】 = 【構造】

主 = 主語 動 = 動詞 目 = 目的語 補・名 = 補語となる名詞

副 = 副詞 関代 = 関係代名詞 過分 = 過去分詞 など

「 」 = 直前部分までの訳（直訳中心）

[] / { } / [[]] など = 注意を要する、句や節などの意味のまとめり

*❶ = 【解説】 とくに注意を要する箇所の指摘および解説

【暗例】 = 例文。暗唱できるようになることを強くお勧めする

() = 省略可、あるいは補足・別表現

[] = 直前の語句との入れ換え可

< > = 重要な用語、あるいは構文・イディオム

【語句】 = 【語句】

[|] = 発音。左側が発音記号。右側が発音時の目安となるカタカナ表記で、ゴシック体はアクセント

⇒ = 派生語・反意語 など

注意点：

【構造】と【解説】は、既出表現や構造が平易な英文については、簡略化、あるいは省略することがある

1

1 ① Up to 85 percent of the jobs that today’s college students will have in 11 years haven’t been invented yet.

構造 **主**^{*1}[Up to 85 percent of the jobs **関代** that **主** today’s college students **動** will have **副** in 11 years]「こんにちの大学生が11年後に持っているだろう仕事の85%までが」**動**^{*2}haven’t been invented **副** yet.「まだ発明されていない」

***1**: 長い主語だが、主語は必ず名詞。ここでは中心となる名詞は (Up to 85 percent of) the jobs で、これが先行詞となって、関係代名詞 that が導く節によって修飾されている。関係代名詞は〈文〉を〈名詞節〉に変換するときに使われる記号と考える。ここでは、today’s college students will have the jobs in 11 years. 「こんにちの大学生は、11年後に、その仕事を持っているだろう。」という文の、動詞 will have の目的語 (必ず名詞) を先行詞とする名詞節に変換したもの。先行詞がもとの文の目的語なので、この関係代名詞は〈目的格〉で、目的格の関係代名詞は省略することもできる。

***2**: 本書では原則として動詞を意味のまとまりとして扱う。ここでは現在完了形の受動態。受動態は〈be 動詞＋過去分詞〉で、文の要素的には〈動詞＋補語 (形容詞)〉とも解釈できるが、できるだけ大きな意味のまとまりでとらえた方が実践的という考え方による。同様に、助動詞や否定語 not, try to do 「～しようと試みる」などの頻出表現も、1つの動詞の意味としてその中に含めるものとする。

語句 up to ～「～まで」、in **副**「～後」**暗例** I’ll be back in ten minutes. 「10分後に戻ります。」、invent [invɛnt | インヴェント] **動**「発明する」

2 That’s according to a panel of experts assembled by the Institute for the Future, although an exact percentage is impossible to predict.

構造 **主****動**^{*1}That’s「それは存在する」**副**^{*2}[according to a panel of experts **過分**^{*3}assembled **副** by the Institute for the Future]^{*4}、「未来研究所によって集められた専門家の委員会によって」**副**^{*5}[**接** although **主** an exact percentage **動** is **補**・**形** impossible to predict]. 「正確な割合は予測するのが不可能だけれども」

***1**: be 動詞は SVC の第2文型をとることが多く、内容的に S = C が成立する。ただし、be 動詞のあとに副詞 (句) が続くこともよくあり、その際の be 動詞は「存在する」の意味でとらえるときよい。

暗例 Help is on the way. 「(助けは道中にある。→) もうすぐ助けが来る。」 いずれにしても、be 動詞はその前後の内容をイコールで結ぶイメージがあることを覚えておこう。なお、〈前置詞＋名詞〉は原則、〈副詞句〉と考えておくとよい。

***2**: according to ～「～によると」は2語で前置詞の役割をする前置詞句。～の部分に名詞が続くことで、全体で副詞句になると考える。なお、前置詞に続く名詞を〈前置詞の目的語〉という。

***3**: 直前の名詞 a panel of experts を後ろから修飾する(〈後置修飾〉という)、過去分詞の形容詞用法。名詞を修飾するから形容詞用法である。この名詞を中心とした意味のまとまり (名詞句) であることを意識すること。

***4**: コンマ (,) は情報を追加するときに使われることが多い。ここでは、接続詞 although が導く副詞節が追加的な情報として扱われている。なお、副詞は〈文の要素〉に含まれないので、なくても文法的

な文は成立するし、その置き場も比較的自由なのが特徴。名詞だけを形容 (修飾) する形容詞と違い、名詞以外のあらゆるものを修飾できる。また、意味のまとまりのうち、〈主語＋動詞〉構造を中心とするものを〈節〉といい、それ以外のものを〈句〉という。

語句 according to ～「～によると」、panel [pænl | パネル] **名**「委員会 (の構成員)」、expert [ɛkspɜ:t | エクスパート] **名**「専門家」、assemble [əseɪbl | アセムブ] **動**「集める」、the Institute [ɪnstətut | インステトゥート] for the Future 「未来研究所 (※1968年設立の、米カリフォルニア州にある非営利研究機関)」、exact [ɪgʒɛkt | イグザクト] **形**「正確な」、impossible [ɪmpɔ:səbl | イムパセブ] **形**「不可能な」、predict [prɪdɪkt | プリディクト] **動**「予測する」

3 The IFTF, an organization that seeks to identify emerging trends and their impacts on global society, forecasts that many of the tasks and duties of the jobs that today’s young people will hold in 2030 don’t exist right now.

構造 **主**[The IFTF^{*1}, an organization **関代** that **動** seeks to identify **目** emerging trends and their impacts on global society], 「IFTF、つまり世界的社会に関する最新の動向やその影響を特定しようとする組織は」**動** forecasts **目**^{*2}[**接** that 「～ということ予測する」**主** {many of the tasks and duties of the jobs **関代** that **主** today’s young people **動** will hold **副** in 2030} 「2030年にこんにちの若者が就いているであろう仕事の作業や職務の多くは」**動** don’t exist **副** right now]. 「たった今は存在していない」

***1**: このコンマは追加情報を表すが、コンマのあとが IFTF という固有名詞を具体的に説明する名詞節になっている (主格の関係代名詞 that 以降が先行詞 an organization を修飾している)。コンマの前後が同じ内容を表すとき、このようなコンマを〈同格のコンマ〉という。

***2**: 文の冒頭に that を置くことで、文を「～ということ」の意味の名詞節に変換できる。このような that が導く名詞節を that 節という。ここは、動詞 forecasts の目的語 (必ず名詞) に that 節が組み込まれている形。

語句 organization [ɔ:gənəʒeɪʃən | オガニゼーション] **名**「組織」、seek [si:k | スイク] **動**「探し求める、～しようとする」、identify [aɪdɛntəfaɪ | アイデンテファイ] **動**「識別する、特定する」、emerging [ɪmɜ:dʒɪŋ | イマゼンク] **形**「出現した」、trend [trɛnd | トゥレンド] **名**「流れ、流行」、impact [ɪmpækt | イムパクト] (on ～) **名**「(～への) 影響」、global [glɔ:bl | グロウバ] **形**「地球の、世界的な」、forecast [fɔ:rkæst | フォケスト] **動**「予測する」、task [tæsk | タスク] **名**「作業」、duty [dʌ:ti | ドウティ] **名**「義務、職務」、exist [ɪgzɪst | イグゼスト] **動**「存在する」、right **副**「(強調的に) ちょうど」

2 ① “Those who plan to work for the next 50 years have to have a mindset of, ‘I’m going to be working and learning and working and learning, and working and learning,’ in order to make a career,” says Rachel Maguire, a research director with IFTF.

構造 **目**^{*1}[**主** {“Those **関代** who **動** plan to work **副** for the next 50 years} 「次の50年間を働く計画の人々は」**動** have to have **目** {a mindset of, 『～という心構えを持たなくてはならない』**目**^{*2}[[**主**動] I’m going to be working and learning

and working and learning, and working and learning]], ‘私 は働いててそして学んでいてを繰り返しているだろう」**副** [[in order to make **目** a career]]],” 『職歴を作るために』**動** says **主** Rachel Maguire, a research director with IFTF. 「と、IFTF の研究部長であるレイチェル・マグワイアは言う」

***1**: 文構造を厳密に言えば、この二重引用符 (“ ”) で挟まれた部分は、文末に近い動詞 says の目的語となる。文の修飾的には、日本語にもあるものなので、直感的に理解できるだろう。目的語が文頭にくるとき、ここのように、文末に〈動詞→主語〉の倒置が起こることがある。この倒置は、主語が代名詞のときには起こらない。

***2**: 単一引用符 (‘ ’) で挟まれた文が、前置詞 of の目的語として扱われている例外的表現。直前の名詞 a mindset の内容を具体的に説明するもので、of の前後が内容的に同等になる。このときの of を〈同格の of〉という。この動詞部分では be working and learning の進行形を3回繰り返して強調しており、「いつでも働き、学んでいる」状態になるだろうという臨場感を強調的に表現している。なお、引用符の入れ子は、米国式は (“ ‘ ’ ”)、英国式は (‘ “ ” ’) で表現する。

語句 those **代**「人々」、plan to do 「～する計画 (つもり) である」、mindset [maɪndset | マインドセット] **名**「考え方、腹つもり」、in order to do 「～するために (※目的を表す副詞的用法であることを明らかにするために使う)」、make a career [kæriə | カリア] 「職歴を作る、出世する」(※米国では、条件のよい会社への転職を繰り返して職歴を作っていくのは一般的なことである)、Rachel Maguire [reɪtʃəl məgwaɪə | レイチェウ マグワイア] **名**「レイチェル・マグワイア」、with **副**「～に勤務して」

2 By 2030, we’ll likely be living in a world where artificial assistants help us with almost every task, not unlike the way email tries to finish spelling a word for users today.

構造 **副** By 2030, 「2030年までに」**主****動** we’ll likely be living 「私たちはおそらく住んでいるだろう」**副** [in a world **関副**^{*1} where **主** artificial assistants **動** help **目** us with almost every task], 「人工的なアシスタントがほぼすべての作業で私たちを助ける世界に」**副** [not unlike **目** {^{*2}the way **主** email **動** tries to finish **目** [[spelling **目** a word]] **副** for users **副** today}], 「こんにち、ユーザーの代わりに e メールが、単語を綴るのを完成しようとするような方法と変わらず」

***1**: 名詞 a world を先行詞とする関係副詞の where。関係代名詞が、もとの文の〈文の要素〉である主語や目的語となる名詞を先行詞とするのとは違い、関係副詞はもとの文の、副詞句の中の名詞を先行詞とすると考える。ここでは例えば、artificial assistants help us in a world. 「ある世界では人工的なアシスタントが私たちを助ける。」という文の、副詞句 in a world の中の名詞 (前置詞の目的語) a world を先行詞にすると、関係代名詞では a world in which artificial assistants help us 「人工的なアシスタントが私たちを助ける世界」という名詞節になる。この in which は〈前置詞＋(代)名詞〉だから副詞で、場所を表す関係副詞 where と交換でき、a world where artificial assistants help us と理論上は等しくなる。なお、本文の a world の前の前置詞 in は living からつながるものなので、関係副詞に含まれる in とは関係ない。

***2**: 関係副詞 how の先行詞となる the way で、the way 以降が前置詞 unlike の目的語となる名詞節。how は the way と一緒に使うことができない。この名詞節は内容的には、e メールで単語を入力し

ている途中で、完成された単語候補が示されることを表している。

語句 likely [laɪkli | ライクリ] **副**「おそらく」、artificial [ɑ:tiʃiəl | アテフィシャ] **形**「人工的な」、assistant [əsɪstənt | アセスタント] **名**「補佐する人、アシスタント」、unlike [unlaɪk | アンライク] **副**「～とは違い」、spell [spɛl | スペル] **動**「綴る」

3 Maguire says it will be like having an assistant working alongside you, taking on tasks at which the human brain does not excel.

構造 **主** Maguire **動** says 「マグワイアは言う」**目**^{*1}[**主** it **動** will be **副** {like having **目** [[an assistant **現分**^{*2} working alongside you]], 「それは、あなたに並んで働くアシスタントを持っていることのようになるだろう」**現分** taking on **目** [[tasks at **関代**^{*3} which **主** the human brain **動** does not excel]]]. 「人間の脳が不得手な作業を引き受けて」

***1**: 動詞 say の目的語となる that 節 (名詞節) で、that は省略されている。it は文脈的に、前の文の内容全体を指すと考えられる。

***2**: 直前の名詞 an assistant を後置修飾する、現在分詞の形容詞用法。なお、コンマに続く taking on も同様に an assistant を修飾する現在分詞の形容詞用法と解釈できるが、コンマに続く部分なので、追加情報の意味合いが強くなる。

***3**: 前置詞 at の目的語としての関係代名詞 which。もとの文は the human brain does not excel at tasks. 「人間の脳は作業が得意ではない。」の形で、これが、副詞句 at tasks の中の、前置詞 at の目的語 tasks を先行詞とする名詞節になったもの。

語句 alongside [əlsəʊsaɪd | アロングサイド] **副**「～と並んで」、take on ～「～を引き受ける」、excel [ɪksəl | イクセウ] at ～「～に秀でる」⇒ be good at ～「～が得意な」

3 ① The U.S. Bureau of Labor Statistics says today’s students will have eight to 10 jobs by the time they are 38.

構造 **主** The U.S. Bureau of Labor Statistics **動** says 「アメリカの労働統計局は言う」**目** [today’s students **動** will have **目** eight to 10 jobs 「こんにちの学生は8から10の仕事に就くだろう」**副** {^{*1}by the time **主** they **動** are **補**・**名** 38}], 「彼ら38歳になるまでに」

***1**: 副詞節はふつう、because (理由) や when (とき) などを表す接続詞に導かれる。ここでは by the time 「～のときまでに」を接続詞 (句) と考える。ちなみに、英文中の整数は、米国式では1から9まで、英国式では1から10までをアルファベットで書く (スペルアウトする) のが原則。ただし、% や kg などの単位を伴う場合は算用数字 (アラビア数字) でよい。また、数字は文頭に来ないように心がけて書くことを勧められるが、どうしても数字から始めるときにはスペルアウトする。英作文の知識として覚えておこう。

語句 Bureau of Labor Statistics [bjʊərəu - leɪbər stətɪstɪks | ビュロウ - レイバ スタステクス] 「(米) 労働統計局」

2 And they won’t necessarily have to take time away from any one of those jobs for training or to gain additional qualifications related to their fields.

構造 **接** And **主** they **動** won’t necessarily have to take time 「そして彼らは必ずしも時間をかける必要はないだろう」**副** [away from any one of those jobs] 「それらの仕事のどれからも離れて」**副** [for training **接** or to gain **目** {additional qualifications **過分**^{*1} related to their fields}], 「(職業) 訓練